２０２４年度
一般推薦入試
（外国語学部　英米語学科）
小論文（　80 点　90 分）

次の文章は、「英語の時代を生きぬく」ことに関するものである。文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

第１問　この文章を 200～250 字でまとめなさい。

第２問　このエッセイの内容について、あなたはどのように考えますか。筆者の見解をふまえ、自分の意見を 600～750 字で論じなさい。

【注意】

① 解答は別紙の原稿用紙に記入しなさい。原稿用紙は２枚配布されます。１枚目に第１問の解答を、２枚目に第２問の解答を記入してください。

② 問題用紙の余白をメモ欄として使用することができます。ただし、解答は必ず原稿用紙に記入してください。問題用紙に記入しても採点の対象とはなりません。

二十一世紀は英語を母語とする人々に有利となるであろう。それというのも英語という言葉に含まれている価値観が世界的な価値観として広く通用し出すからである。

グローバル市場に働く論理は経済だけでなく、その他の面でも世界的に共通する規制や規格や価値観を押し付ける。英語が米英のみならず EU においても、いや東アジアにおいても、共通語の地位を占める二十一世紀、非英語人の多くにとっては言語についても英語の使用を「押し付けられた」のが現実である。だがこれとてもただ受身的な受けとめ方をするべきではあるまい。英語を駆使することが日本人にも与えられたチャンスであり、日本のサーヴァイヴァルもその駆使能力にかかっていると観念するべきではあるまいか。

もちろん世間が英語の使用をいわば所与の条件として受け容れてしまえば、英語の得意、不得意によって日本人も選別され差別されることになる。インドや東南アジアでは英語の出来不出来によって賃金収入もすでに大差があるという。日本人も次第にその言語的分水嶺 English divide を自覚するようになるだろう。それというのもこれから先、日本人は言語能力によって区別され、差別されるからである。いやすでに日本国内でも英語の能力によって入学試験や就職や給料にその差は反映している。元来が非英語人であるわれわれの多くはこの「英語の世紀」という格差世界において不利な戦いを強いられる。英語力においてネイティヴには敵うべくもない。このような時期には、攘夷鎖国的心理がよみがえることは避け難い。

しかしこれから先のグローバル社会では、わが国の生存のためにも、言語的・文化的差異を克服した二言語・二文化を一身に体得した、バイリンガルでバイカルチュラルな日本人を養成する必要がある。

わが国の当局者に外国語で太刀打ちできる実力がなければ、日本は他国と競争裡に協調し、自己の意思を上手に通じさせて、生きてゆくことは難しくなり、日本が国際社会の中で名誉ある地位を保つことは心もとないだろう。だが、そうはいっても日本の知的選良は外国産の価値観に屈服する人であってはならない。自分自身の文化的アイデンティティーは大切に保持することも望みたい。この両面作戦を戦うのは容易でない。

シンガポールが陥落した一九四二年二月十五日以降、かつて英米人によって高らかに唱えられた「白人の重荷」の思想は破れ去った。白人が主導してこの地球社会に安寧秩序をもたらすという考え方は次第に過去のものとなりつつある。その代わりにいまや白人以外の人々も、またこの地球社会で重荷を担わなければならない。その際、その重たい荷物の最たるものが英語という重荷である。だが言葉は重い負担であるかもしれないが、それはまた有利な知的資産でもある。二十一世紀には多くの日本人は地方語としての日本語とともに標準語としての英語を今よりはるかに上手に使いこなすようになるだろう。

そして、世間一般がバイリンガルになる時代においてもなお発言力を持ちうる知識人であるためには、英語だけでは足りない。トライリンガルな、第二外国語をも駆使し得る、三点測量のできる能力が求められる。そのような多力者こそ、より公平な判断を下しうる、この地球社会の安定的要素になるに相違ない。多力者の存在は、実は世界各国に求められているのである。そしてそのような多力者となるためには、後天的に学習することが難しいとされる日本語のような言語を母語として習得している日本人は、他国の人々に比べて、けっして不利な地位に立たされているわけではないのである。

なおさらに付け加えれば、日本人の場合にはその多力者の条件をやや緩めに考えて、第二外国語の一つとして日本語の古文や漢文もかぞえてよい、と私は考えている。三点測量は空間的だけでなく時間的に行なうこともまた有効だと判断するからである。

平川祐弘『日本語で生きる幸福』河出書房新書（2014）209-212 ページより作成